

Rebecca Styler, *Literary Theology by Women Writers
of the Nineteenth Century*

Farnham, England: Ashgate, 2010. 180 pp.

ISBN: 9780754667353 (hbk.) £ 55

ISBN: 9781409423195 (e-book)

閑田 朋子

英国ギaskell協会の『ギaskell・ジャーナル』(*The Gaskell Journal*)の表紙をめくるとすぐに目に入る編集委員のメンバーのなかに、この著者の名前を見憶えている方もいらっしゃるだろう。あるいはこの著者が『ギaskell協会ジャーナル』(*The Gaskell Society Journal*、現 *The Gaskell Journal*) 21 巻に投稿した『魔女ロイス』—ユニテリアンの物語—(“Lois the Witch”: A Unitarian Tale)を思い出されるかもしれない。本書の著者は2007年には英国ギaskell協会国際会議でゲスト・スピーカーを務めた。レベッカ・スタイラーは新進気鋭の研究者である。本書は、19世紀に教会や大学で行われた公式な神学の討論の場から女性が締め出されていたことを、論の出発点に据えている。締め出された女たちが宗教について論じようとすれば、いわばアマチュア神学者として別のアリーナが必要だ。そのジャンルは、ポピュラー・フィクション、ライフ・ライティング、詩、政治的著作物、批評など多岐に渡るが、いずれの場合も女性の手による宗教的著作は、高邁で難解な神学とは一線を画した。スタイラーは、彼女たちが神学を日常レベルにまで引きつけて、その意味を(特に男たちの)従来の解釈から解き放ち、再構築するさまを、検証して行く。

第一章は、女性作家の宗教的著作物が社会に受け入れられた文化的・知的コンテキストを概観している。1970年代以降の当該分野の宗教文学関連の必読文献が、過不足なくもられているので、これが実にありがたい。伝統的には、宗教は神学の専門家である聖職者の説教を通して俗界に伝えられてきた。だが、非専門家が文学の形をもって想像力や感情に訴えれば、やはりその方が一般大衆には馴染みやすいだろう。スタイラーは、このような認識が当時の社会にあったことを確認したうえで、女性と宗教・神学とのねじれた関係に話を進め、女性が宗教に関わ

ることでばやけていく聖俗の境界に言及する。

第二章は福音主義作家エマ・ワーボワーズ (Emma Worboise) を扱っている。ワーボワーズの小説は、ヒロインの恋愛あり友情あり、それに困難ありといったお決まりのコースをたどるから陳腐といえば陳腐だが、信仰を試されながら成長するヒロインの姿は爽やかであり、その健全な小説は売れに売れて版を重ねた。とは言え、現代ではあまり馴染みがない作家なので、章冒頭でスタイラーはざっと作家紹介を行っているのだが、本書のテーマがテーマであるだけに、会衆派に所属した銃砲製造業者だと言われるワーボワーズの父親を英国国教会の教区司祭だと言い切っている点はどうにも気になる (19)。

この章は、『トマス・アーノルドの生涯』(*The Life of Thomas Arnold*, 1859) の執筆・出版を転換期としてワーボワーズの作風が変わり、小説のヒロインたちが男性主体の価値観に対して以前のヒロインたちよりもはっきりと物申すようになった様を検証している。それでは『トマス・アーノルドの生涯』がなぜ分岐点になり得たのか。スタイラーによると、当時の女性作家の手による伝記は、女性読者に範を垂れんと女性の人生を描く場合が圧倒的に多かったのだが、ワーボワーズは男性であるアーノルドの伝記を書いた。しかも女性読者に、アーノルドを手本として、政治にキリスト教精神を持ちこむことを勧めて、アーノルドの試みそのものを脱ジェンダー化していく。このようなスタイラーの論は説得力もあれば興味深くもある。それだけに、アーノルドはワーボワーズが崇拝した人物であり、他の著作でもしきりにアーノルドに言及しているのだから、これについてより詳細な情報が欲しいという気持ちが湧いてくる。

第三章は、アン・ブロンテ (Anne Brontë) の詩に表れる宗教的葛藤を考察する。まずスタイラーは、ギaskellの『シャーロット・ブロンテの生涯』(*The Life of Charlotte Brontë*, 1857) に言及している。そこには姉シャーロットの目から見たアンの姿、死を前にしてなお「殉教者が持つ、信仰に支えられた勇氣と不屈の忍耐」(“the pious courage and fortitude of a martyr”) に支えられているアンの姿が留められている (43)。一方、近年の研究は、アンの小説のリアリズムや社会風刺に注目して、彼女をジェーン・オースティン (Jane Austen) のような理性を重んじる作家としてとらえる傾向にある。そのようななかでスタイラーはアンの詩に注目し、数々の詩に込められた宗教上の葛藤を浮き彫りにする。アンは信仰が持つ二つの

次元の間で苦悩する。すなわち時に恍惚感を伴う感性としての信仰と、常日頃から己を厳しく律する理性と道徳の信仰の間で揺らぐのだ。やがて理性と道徳の信仰が前景化していくが、それは安定したものにはなりえない。ここでキリスト教実存主義という観念を持ち出す必要があるかどうかは疑問であるが、ジェンダーを視野に入れて、アンの個人としての葛藤を、ロマン派や啓蒙主義、福音主義といった思想上の大きな流れと関連付けた分析は、巧みにして面白い。

第四章は、女性作家が、聖書でおなじみの女性たちの人生を、列伝形式で著した作品を取り上げている。作家の名を挙げれば、ルーシー・エイキン (Lucy Aikin)、ジュリア・キャヴァナ (Julia Kavanah)、クララ・パルフォア (Clara Balfour)、セアラ・ヘイル (Sarah Hale)、グレイス・アギラ (Grace Aguilar)、エリザベス・チャールズ (Elizabeth Charles)、アナ・ジェイムソン (Anna Jameson) など、かつては顧みられることがなかったが、今ではすぐにでも本章を読もうという気にさせる女性作家の名前がずらりと並ぶ。本章のタイトル「彼女たち自身の聖書」(A Scripture of Their Own) がショーウォルター (Elaine Showalter) へのオマージュになっていることは言うまでもない。彼女たちは、イヴを、デボラを、マグダラのマリアを伝統的な解釈から解き放ち、書き変えて、二十世紀後半のフェミニストたちの聖書解釈さながらに、女性解放の戦略的な礎に据える。

第五章は当協会会員には特に興味深い章なのではなかろうか。ギaskellと親交があったハリエット・マーティノー (Harriet Martineau) が、「ユニテリアン作家」であった時期を考察しているからだ。まだ駆け出しの作家だったマーティノーは、1829年にウィリアム・フォックス (William Fox) が編集していたユニテリアン雑誌『マンスリー・リポジトリ』(Monthly Repository) に唯一の常勤ジャーナリストとして雇われて、続く三年間、本誌の主筆として筆を走らせた。フォックスは言うまでもなく、ギaskellの親友トティー (Tottie) ことイライザ・フォックス (Eliza Fox) の父親である。

この時期に、ユニテリアン派は重大な局面を迎えていた。1813年にユニテリアンの信仰が合法となつてからすでに十数年がたった。しかもヨーロッパや北米で同派は確実に勢力を増していたから、ユニテリアン派の人々は自らのより堅固な政治力を自覚していた。さらに1832年の選挙法改正はもう目前だった。改正が行われればユニテリアンのミドルクラスの信者がより大きな政治力を持つ

だろうことが期待された（108）。ユニテリアン派が少数派として守りに徹する時代は終わった。彼らは社会に向けて新しい自己像を差し出す必要があった。ここで従来の女性の宗教活動の枠組みを大きく超えて、重要な役割を果たしたのがマーティノーであった。彼女はユニテリアニズムを、選挙法改正後に来たるべき新時代の価値観、つまりミドルクラスの価値観を裏書きする神学体系として提示したのだった。

最終章である第六章を飾るのは、スタイラーいわく「本書で考察されている作家のうちでも一際抜きんでて急進的」（125）なジョゼフィン・バトラー（Josephine Butler）である。バトラーの社会的な活動は多岐にわたるが、彼女が一番心血を注いだのは、伝染病（実質的には性病）予防法の撤廃運動であろう。スタイラーは、19世紀後半にバトラーが売春や伝染病予防法を論じたスピーチや著作を調べ、そこに埋め込まれた宗教観を分析し、それを「解放の神学」（Liberation theology）の伝統の中に位置づける。二十世紀にラテンアメリカのカトリック司祭の間から興った「解放の神学」は、政治的・社会的圧迫から人類を解放する実践的な神学を謳ったわけだから、社会を変える実践のなかに信仰を見ていたバトラーの宗教観と関連付けたくなる気持ちは分からないでもないが、時代も場所も全く異なるわけだから、やはり正直なところ面食らった。

以上六章を通してスタイラーは、彼女が考察を行ったすべての女性作家たちが、伝統的に受け継がれた信仰の枠組みと、キリスト教徒として苦しむ同胞のためにすぐにでも何かをしなくてはならないという切迫感、そして女性でありながら神学体系を語るといふ曖昧な社会的立場の間でバランスを取りながら、社会におけるキリスト教の意味と目的、そして神学者の役割を再解釈したのだと結論付ける。

読了後に、一貫したテーマがあるにもかかわらず六本の別々の論文を読んだという気持ちになるのは、章と章の関連付けの問題だろう。社会の変化を視野に入れた論の展開をしているにもかかわらず、章が進むにつれて時系列が行ったり来たりするので混乱しやすい。二章の中心となる『トマス・アーノルドの生涯』が書かれたのが1859年、五章では1829年から32年のマーティノーが駆け出しだった時代、六章は19世紀後半に飛んでバトラーといった具合だ。だが当たり前ながら完璧な研究はない。確かに熟練した研究者特有の安定性に欠けてはいるかもしれないが、本書は魅力的でありかつ示唆に富む一冊である。読者に多くのキリ

スト教に関連する社会史的な知識を与えてくれるし、それぞれの章の論旨は明快だ。物足りないと思うところがないではないが、言葉を換えればもっと知りたいと思わせることもまた著者の力量であろう。本書のギヤスケルへの言及は仮にも多いとは言えない。だがそれだけに個々の記述について、「ではギヤスケルの場合はどうだろうか」と考えて、しばしば頁を繰る手が止まる。様々な意味で「開かれた」本だと言える。

(日本大学准教授)

